

甲 蟲 類 雜 感 (二)

水 棲 甲 蟲 類 に 就 て

神 谷 一 男

1. スヂゲンゴロウの分布

スヂゲンゴロウ *Hydaticus vittatus* FABRICIUS はシマゲンゴロウ *H. Bowringi* CLARK に酷似して、體は光澤ある黑色を呈し、觸角・兩鬚・前中兩脚・前胸背の兩側及び各翅鞘の2條線は總べて黄色、體の下面及び後脚は濃赤褐色である。翅鞘の2條線はその中途にて合して1本となり、内縁角の近くの黄紋を缺き、點刻は一層細微である點等がシマゲンゴロウと異なる。形も幾分小形にて14mm. 内外のものが普通である。

これが分布に就て、最初 LEWIS が九州及び本州に於て採集したのを SHARP が(Trans. Ent. Soc. London, 1873, p. 38.)發表し、岡本半次郎氏は(朝鮮總督府勸業模範場歐文報告、第1卷第2號)朝鮮(濟州島)・四國を追加せられ、著者は會て臺灣に於て數頭を採集した。尙九州・臺灣に於ては各地に普通に産するもののやうである。内地に於ては比較的珍らしく LEWIS は内地の何處で採集したものか今知ることは出来ないが、昨年(1929) 8月山口市附近に於て學友羽隅侃次君は著者の依頼に依つて4頭捕獲せられた。蓋し、同地方に於ても可成少いもののやうに想像される。尙同地方はシマゲンゴロウは極めて普通である。

要するに本邦に於けるスヂゲンゴロウの分布は臺灣・琉球・朝鮮・九州・四國・本州であり、本州に於ては中國以南に知られてゐる。この外に於て採集せられた方は御教示を乞ふ。

2. 東京附近に産する *Orectochilus* 屬に就て

東京附近に産する *Orectochilus* 屬は SHARP が 1884 年 Trans. Ent. Soc. London, p. 449 に於て *O. punctipennis* SHARP (ゴオナガミヅスマシ) を發表

したのが最初と思ふ。松村博士は日本千蟲圖解、第 3, p. 18 に於て *O. Regimbarti* SHARP (オナガミヅスマシ) が東京地方に稀ならざるやう記載せられ、學友鹿野忠雄君は今より數年以前、中野附近に於て *O. punctipennis* SHARP を採集せられた。尙先輩寺西暢氏は 1920 年頃玉川に於て十數頭の *Orectochilus* 屬の 1 種 (*O. agilis* SHARP「ツマキリオナガミヅスマシ」?) を採集せられた(この標本は著者保存)。

著者は最近 2-3 年間玉川附近は勿論中央線中野以西(中野附近は震災後水田小川等は大部分埋立てられ水棲昆蟲の棲息する餘地は殆どない。)淺川高尾山麓に到るまで可成り注意するも、残念ながら今日まで 1 頭も *Orectochilus* 屬を認めることが出来ない。尙先輩佐藤覺氏の談によると *O. punctipennis* SHARP と思はれるものが今より 8-9 年以前まで玉川附近に於て採集せられたやうである。*O. Regimbarti* SHARP を松村博士は東京附近に産するやう記載せられたが、SHARP は 1884 年 Trans. Ent. Soc. London, p. 448 に於て日光中禪寺湖に於て採集せられたる標本を記載し、著者は昨年(1929)7月箱根蘆ノ湖に於て多數採集した(蟲、Vol. I, p. 26)最近東京附近に於て採集された噂さへ耳にしない。その他總べての *Orectochilus* 屬が東京附近から消え去つたのか、それとも未だ著者等の注意が足りないのか疑問である。尙引續き注意するが、諸氏の中にて最近この屬を東京附近より採集せられた方があるなら御通知を乞ふ。

3. ゲンゴロウモドキ大阪附近に産するか?

ゲンゴロウモドキ *Dytiscus marginalis* L. はゲンゴロウ *Cybister japonicus* SHARP より幾分小形にして、雌は翅鞘に太き數條の凸線がある。本州では珍らしく、樺太・北海道には多く、本州に於ても日光中禪寺湖・箱根蘆の湖等、比較的冷たき水中に棲息してゐる。ところが著者は本年大阪へ旅行した際、同地の採集家戸澤信義氏宅にて、同氏所藏標本中に大阪附近より採集せられた *D. marginalis* L. を認め、その後寺西暢氏(曾て盛んに水棲甲蟲類を集められた)もこれを産するやう話された。大阪附近にこれを産するといふこと

ま分布上非常に面白いことだと思ふ。今後同地方の採集家の注意を望む。

4. 武州高尾山麓附近に産する 2-3 の水棲甲蟲類に就て

ゴマダラチビゲンゴロウ *Hydroporus natrix* SHARP モンキマメゲンゴロウ
Platanus pictipennis SHARP 及び牙蟲の 1 種 *Hydrocylus lacustris* SHARP 等
 は内地では比較的高地例へば日光中禪寺湖(約 1270m.)箱根蘆の湖(720m. 内
 外)、赤城山大沼(1300m.内外)等に普通産するもので、平地では(特に東京附
 近では)認めない。ところが高尾山麓(約200-250m.)附近に於て多數産する。
 尚この外にも斯くの如き例は多數にあると思ふが、水棲昆蟲の採集地として
 も高尾山麓は極めて面白いところである。

ヨナクニサンの分布

ヨナクニサン (*Attacus atlas* L.) と云へば、日本版圖内で最も大形の蛾で有名であるが、以下之の分布に就て述べて見よう。

本種は、人も知る如く、東洋州的な種であつて、日本版圖内では臺灣と琉球の一部に分布して居る。

臺灣に於ては、四五千尺の地以上を除き、何れの地方にも分布する種類で、敢て珍らしくはないが、決して多い種ではない。夜森林中で燈火採集をして居ると、間々此の蛾が來ることがあるが、此の時は、あの大きな翅をバタバタやるので、實に壯觀である。まるで大きな鳥でもやつて來た様である。

琉球では與那國島に産する。又石垣島にも現今見出される。それ以外の琉球の諸島には發見されない様である。今では石垣島にも産するが、之は昔から天然に産したものでないことは明かで、同島の比統氏(同島で昆蟲の採集販賣をして居る)が、數年前に、臺灣から此の蛾を輸入して山野に放したのが擴がつたのであると云ふ(同氏の談に據る)。此の様に、明かな人爲の分散方法に依つて天然の分布がかき亂されるのは注意すべきである。此の様に、明かに分つて居るのはよいが、不明なものは重大な結果を招致する。

以上の如く、此の蛾は、其の名の示す與那國島から、臺灣、更に印度其他東洋地方に分布するのであるが、斯く見て來ると、此の蛾は現時動物分布上最も明瞭な東洋區域に互つて分布して居るといふことが分る。(鹿野忠雄)